かけはし

静岡大学 教育学研究科 教職大学院
NEWSLETTER
No. 1
2016年7月1日

静岡大学教育学研究科・教職大学院　〒422-8529 静岡市駿河区大谷836 TEL 054-258-4701(山口研) URL http://www.dapse.ed.shizuoka.ac.jp/

巻頭言

創刊号に寄せて
教職大学院の前進のために

菅野 文彦
（静岡大学教育学研究科長）

静岡大学教職大学院のニュースレター創刊にあたり、研究科長としてご挨拶させていただきます。

教員養成・研修を担う専門職大学院としての教職大学院制度は平成20（2008）年度から、何重もの意味で壮大な実験として、挑戦として開始されました。「採用前の教員養成は大学（院）が、着任後の現職教員研修は教育委員会等が、それぞれ専ら担う」という分離体制から、「養成と研修の両方に大学（院）と行政の両者が協力・分担しつつ総合的に関わる」という方向への転換において、教職大学院制度の創設はその画期となるものでした。大学（院）側から見ると、教育体制の構築や運営にあたって教育行政や学校現場との緊密な連携が日常化したことをはじめ、そこでは複数の要素の新しい形での出会い（直し）が様々に生ずることとなりました。理論と実践との「往還」等と言われる通り、座学的な学びばかりでなく学校現場等での実習的な学びが大幅にとり入れられ、両者を結ぶ「省察」、「アクション・リサーチ」等が強調されました。人的には、以前からあった現職（派遣）教員大学院生と学部卒大学院生（ストレートマスター）との共存・相乗作用という契機が新たに意味づけ直されたり、教員構成においては従来からの大学教員を「研究者教員」と呼び換え、新たに加わった「実務家教員」との間の連携・協働が課題となったりもしてきました。

静岡大学教育学研究科も、平成20（2008）年度の修士課程内「高度教職実践専修」の先行実施を経て、翌平成21（2009）年度には独立専攻である「教育実践高度化専攻」として教職大学院の正式なスタートがきられました。以後７年ほどの間、関係教員や大学院生の皆さんの努力によって、また静岡県教育委員会をはじめとする県内教育界の皆様からの心強いお支えをいただいて、新しい使命に応える努力を重ね、成果をあげてまいりました。

しかし、私たちがさらに確かな前進をしていくためには、新しい使命の遂行にあたって、私たちがどこまで主体的、挑戦的で、誠実かつ謙虚であり得てきているか、という厳しい問い直しが不可欠です。改革を続ける学部や附属学校園、教科教育の専門性に強みをもちながら再編を迫られてもいる修士課程、新しい課題にとりくんでいる共同博士課程などとの連携を活かした今後のあり方をめぐっても、学内関係者の間で議論を重ねていかなければなりません。また、現員ばかりでなく、大学（院）教員ＯＢや修了生の皆さんのお声も是非お寄せいただきたいです。さらに、とくに静岡県内では、常葉大学でも教職大学院が優れた成果を積まれ、県教委に加えて政令２市がそれぞれ責任ある教育体制を築かれてきているところに、昨年末の中教審答申でも「教員育成協議会（仮称）」の体制が提起されるなど、多様性を帯びた新たな連携・協働のあり方が全国的にも注目を集めています。

このニュースレターが、以上のような趣旨で私たちの発信媒体として機能し、皆様のお声をいただくうえで実効あるものとなるよう祈念しますとともに、皆様からのご支援を切にお願い申し上げます。

協働関係に基づくハブ機能を果たす教職大学院

教育実践高度化専攻長　山﨑　保寿

静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻（教職大学院）は、平成21年に開設して以来、一貫して、「スクールリーダーに相応しい力量を備えた中核的中堅教員の育成」および「新しい学校づくりを進める高い実践力を有した新人教員の育成」を目指してきました。この間、学校や教育委員会等との緊密な協働関係を構築することによって、大学教員の社会貢献と院生の学修成果の還元に努めてきました。同時に、教育課題に対する院生の分析・考察力や企画・実践力を一層高めるために、教職大学院における実習の方法やカリキュラムを改善してきました。

こうした中、最近は、学校や教育委員会等と連携しつつ高度なレベルで教育課題や行政課題に対する課題解決を図るための連携システムを構築する役割、いわゆるハブ機能を果たすことが教職大学院に求められるようになっています。その背景には、教員育成協議会の設置と教員育成指標の策定をはじめ、チーム学校としての協働体制の確立、教職員の多忙化の解消、いじめ防止への組織的対応、アクティブ・ラーニングなど新たな学習方法の推進、インクルーシブ教育の理解と拡大等々、単一の方法では解決の難しい様々な課題に直面している教育界の状況があります。

こうした課題に対して、日頃から実習を通じて院生が関わるとともに、教職大学院の組織力を注入して、現場・院生・大学教員が一体となって課題の解決に当たる基礎態勢を築いておくことが重要になります。さらには、そこで得られた課題解決の方法や成果に関する知見をまとめ、それをモデルとして広く教育界に発信していくことも重要になります。これによって、教職大学院の成果を一層広く適用し汎化していくとともに、連携のハブ機能をより良く発揮することが可能になるわけです。これまで、多くの院生が課題研究の成果として指導教員と協力して作成した実践ハンドブック、課題解決ガイドブック、ライフモデル集など、また、学校内・学校間等のシステムの構築は、こうした態勢から生まれた活用性と汎用性の高い成果物といえます。

今後も、教職大学院では、大学教員と院生が協働して、学修成果を学校や地域・教育委員会等に積極的に還元していく態勢を基礎にして、課題解決に関する相互の連携を構築していくハブ機能としての役割を果たしていくことが目指すべき方向となっています。

教職大学院　教員紹介

氏名　① 役職　② 担当　③ 担当の具体

学校組織開発領域

山﨑保寿 ①教育実践高度化専攻長 ②カリキュラム・マネジメント ③次期学習指導要領と教育政策の動向

三ッ谷三善 ①教授 ②学校組織開発 ③実習、教職大学院と教育委員会及び学校との連携等

武井敦史 ①教授 ②学校組織開発領域 ③「学校経営の実践と課題」

渋江かさね ①准教授 ②成人教育学 ③主な授業は「成人の学習の事例と理論」

島田桂吾 ①講師 ②教育行政学 ③主な授業は「学校の危機管理の実践と課題」

山口久芳 ①特任教授 ②学校経営学 ③主な授業は「教育政策の流れと学校論」

教育方法開発領域

村山功 ①教授 ②学習理論、学力、評価、教材 ③事例を用いながら、すべて授業改善と関連づけていきます

石上靖芳 ①教授 ②教育方法 ③教師教育学、教育方法論を基盤に「授業分析と校内研修の新たな展開」

矢崎満夫 ①准教授 ②年少者日本語教育・多文化共生教育 ③教育現場における多様性・マイノリティ支援

益川弘如 ①准教授 ②学習科学 ③主な授業は「授業と学習のメカニズム」

生徒指導支援領域

原田唯司 ①教授 ②学校心理学 ③実践的研究指導の他、「子ども苦戦」「他機関連携」

伊田勝憲 ①准教授 ②教育心理学 ③「子ども理解と学校教育相談の在り方」

石田純夫 ①特任教授 ②生徒指導・教育相談 ③主な授業は「グループアプローチ開発」

鈴木秀志 ①特任教授 ②生徒指導領域 ③主な授業は「学級経営の実践と課題」

特別支援教育領域

大塚玲 ①教授 ②発達障害学・特別支援教育 ③授業「特別支援教育のシステムと方法」

岡本康哉 ①特任教授 ②特別支援教育 ③「特別支援教育コーディネーターの理論と実践」

修了生奮闘記

島田市教育委員会学校教育課　指導主事　岩尾 秀幸
４期生（H24～H25 年度）生徒指導支援領域

「『変わらない』ために『変わっていく』」これは、今の自分のキーワードです。変換すると、「子どもの成長」という教師としての変わらない目標のために、「自分自身は常に変わっていく必要がある」ということです。このキーワードは、教職大学院で学びのきっかけを得たことから生まれています。

その学びのきっかけは、大きく三つあります。一つ目は、今までの実践を理論と結び付けて意味付けし、教師である自分を見つめ直すことができたことです。二つ目は、様々な視点を増やし、つなげ、打つ手を増やすことの重要性を知ったことです。三つ目は、院生の仲間同士と対話し、違いを知ることでコミュニケーションを深められたことです。これらは学びのきっかけであり、教師としての学び方を学んだのだと思っています。本当の学びは、教職大学院修了後が重要です。現在、島田市教委指導主事となり、子どもと直接的に関わる場にはいませんが、教職大学院で得た学びのきっかけを生かし、子どもの成長のために、常にマイナーチェンジし、学び続けようと奮闘中です。

三島市立長伏小学校　教諭　本荘 文康
６期生（H26～H27 年度）学校組織開発領域

「グローカル」の意味は、世界的であるとともに、地域的であること（現代カタカナ語辞典）です。今後、子どもたちが生きていく世界の有り様を想像し、地域とともにある学校を意識し教育活動をすることは重要です。このような視点を得ることができたのは静岡大学教職大学院での学びがあったからです。

しかし、４月からこれまでの自分は「愚」ローカル、このような表現がふさわしい。大学院から学校に戻り、新しく赴任した学校が積み上げてきた実践を把握すること、何よりこの地区が育んできた子どもを知ることを通して、愚かな自分の認識を改める日々であり、大学院で学んだ理論は、そのままの形では学校に当てはめることはできないことを改めて実感しています。現在は教務主任として、「具」ローカルを意識して、業務に取り組もうと心がけています。つまり、所属校・地域に合った具体的な提案・実践をするということです。今後も、「グローカル」の「具現化」に向けて「愚直」に努力を続け、静岡大学教職大学院の掲げる「理論と実践の往還」を体現していきたいと考えています。

学びの宝石箱　授業編 / 実習編

特別支援教育領域　Ｍ１　水野靖弘

「特別支援教育のシステムと方法」の授業では、特別支援教育に関する身近な話題からグローバルな話題まで、幅広い内容が取り上げられています。先日の授業では「しょうがい」の表記について取り上げられました。現状では、法令等では「障害」、静岡市などでは法律用語を除く一部を「障がい」と表記しています。この表記に関して、平成 22 年の障がい者制度改革推進会議で、様々な議論がなされていたことを授業で知りました(その他にも「障碍」や「チャレンジド」なども挙げられていました)。

立場によって考え方や捉え方に違いがあり、それらの意見を一つにまとめることは大変難しいです。しかし、議論を重ねることで、互いの思いを知り、互いの理解が進んだり、言葉の持つ意味がより深いものになったりするのではないかと感じました。日常でもこのような場面を大切にしていきたいです。

教育方法開発領域　Ｍ２　八木橋秀夫

私のアクションリサーチは「小学校における英語の教科化に向けての試行」です。小学校での「読むこと」「書くこと」の指導法を検証するため、現在は実習校の６年生に小文字のアルファベットの授業を行っています。外国語活動の授業の中では簡単な会話やゲームを通して文字と音の結びつきを学び、「書くこと」については、週１回１０分間の朝の活動でアルファベットを書く活動に取り組んでいます。大文字に比べ、小文字には４線のどこに書くかわからない、似ている文字があるなどの難しさがあり、工夫して指導する必要があります。写真は小文字を４線内のどこに書くかを意識するために、書く位置に合わせてしゃがんだり立ったりしながら ABC の歌を歌っているところです。今後は文字に慣れ親しむ活動を継続しつつ、身近にある英単語を収集する活動も取り入れて、文字と音がよりつながるよう指導していきたいです。

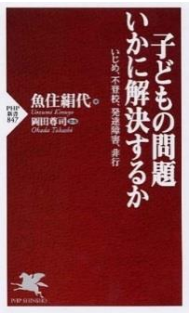
お薦めします　ブックレビュー

「日本人と英語」の社会学
寺沢拓敬
研究社　2015

次期学習指導要領改訂では、小学校5，6年生での外国語活動が教科となり、それを受けて 3 年生から外国語活動が行われるようになる。

文科省のみならず、世間一般からも早期英語学習の利点が当たり前のように論じられているが、説得力のある理論やデータが提示されていないことが、この本からわかる。社会のニーズや必要性など、正しく認知した上で、今後の外国語教育とどう向き合っていくべきか考えさせられる一冊である。

（学校組織開発領域　M1　清澤）



子どもの問題いかに解決するか
魚住絹代著／岡田尊司監修
PHP 研究所　2013

学校で子どもたちが見せる問題行動は、さまざまである。いじめ、不登校、学校不適応、校内暴力、学級崩壊・・・。親や教師のどうにかしたいという思いが、問題解決につながらず、逆に事態を悪化させてしまっていることも少なくない。どのように問題を見立て、関わり、対応していけば、問題の表面的な改善にとどまらず、根本的な回復につながっていくのか。本書は、小中校の学校現場で実際に問題の解決に携わってきた中で確立してきた方法のエッセンスをまとめたものである。

（生徒指導支援領域　M1　深谷）

＜教職大学院年間スケジュール＞

４月　４日	入学式
４月　６日～	ガイダンス
４月　８日～	前期授業開始
６月３０日	２年次構想発表会
７月３０日	オープンキャンパス
８月　３日～	大学院願書受付（～１２日）
９月１５日	大学院入試
９月２７日	大学院入試合格発表
１０月　１日	後期授業開始日
１０月２０日	M２中間発表会（予定）
１１月１８日	静大祭（～２０日）
１２月２９日～	冬季休業（～１月４日）
３月　４日	成果報告会・M１報告会（合同予定） 終了後＜第１回同窓会を予定＞
３月２３日	学位伝達式

＜院生広場＞

○第７回静岡大学教職大学院公開成果発表会 平成29年3月4日（予定）終了後、同窓会を計画しています。ご案内などの連絡のため、以下の方々のご連絡先（メールアドレス）をご存知の方は、下記のアドレスまでご連絡ください。eyamag@ipc.shizuoka.ac.jp（山口）【０期生 太田さん（方法）本田さん（方法）１期生 西野さん・大石さん・森さん（生徒）４期生 大石さん（方法）５期生 吉岡さん（生徒）】

発行責任者	専攻長	山﨑　保寿
監修	担当教員	山口　久芳
顧問	M2 代表	松岡　龍吾
編集長	M1	伊藤　智美
副編集長	M1	臼井　秀明
	M1	深谷　陽平
	M1	水野　靖弘
	ストレートマスター	芦澤　優樹
	ストレートマスター	萩原　万葉
発行担当領域（学校組織開発領域） 清澤　涼介　　三宅　秀典　　村松　邦彦		

題字　ストレートマスター　北住　美來

編集後記

今年度より、静岡大学教職大学院ニュースレターを発行することとなりました。タイトルの「かけはし」は理論と実践の往還、学校現場のニーズと教職大学院での研究の整合、大学院生と実習先の先生方との協力など「つながり」をあらわしたものです。このニュースレターを通し、教職大学院における学びを発信し、学校現場との「つながり」を深めていければと考えております。

発行に際し、原稿執筆等、多くの先生方にご協力いただきありがとうございました。（伊藤）

次号発行担当領域は　特別支援領域です